

第1回

第1問

テーマ（寡占市場における企業の行動）

これは、須田試験委員の研究テーマの議論としてズバリのものである。

「産業組織論」のブームということもあり、大学院入試試験や各種試験でも独占や寡占、独占的競争、それにともなってゲーム理論が出題されている。

ちなみに、今ではゲーム理論が公務員試験に出題されるほど市民権を得ている一般的なものである。

この問題では、まず「屈折需要曲線」が導出できれば、ほぼ合格点。

屈折する理由が寡占にある企業がそれぞれ「追随」「静観」という背景が存在している。「ナッシュ均衡」や「囚人のジレンマ」を説明する上で、自分でモデルを作って説明しても良いだろう。

第2問

テーマ（国債発行）

マクロ経済学からの出題は、毎年、その年に話題になった時事問題に絡めてくる。

では、今年一番問題になったのは何か？もちろん、「年金問題」である。

二番目がこの「国債」だと思います。

酒井試験委員としては、そこに買いオペレーションなどの実際に行われている金融緩和政策を絡めて出題してくるかもしれません。

この問題は、IS-LM分析によって、国債発行の効果を「中央銀行引き受け」と「市中消化」の場合に分類して、その相違を明示できれば合格点。

商業銀行の購入については、短期国債のように流動性の高い（貨幣に近い）国債を購入させ、貨幣供給量を増大させる効果に類似した政策も考えられるし、長期国債であれば、純粹に市中にある貨幣を吸い上げるマイナスの効果（LM左シフト）が見出せる。

個人購入のように、長期国債の購入になれば、「資産効果」が考えられる。

つまり、 L_2 （投機的動機に基づく貨幣需要）の増大によりLM左シフトが重要な論点になる。

この論点は、国債の期間が長期であればあるほどLM曲線の左へのシフト幅が大きくなり、国債を財源に裁量的財政政策を実施してもまったく経済的な効果は見出せないことになる。

（2）不況対策 長期国債よりも貨幣に近い短期国債を発行する方が効果的。

利子費用最小化 不況時には長期国債の発行の方が望ましい。これは、不況時には、利率が低下するために、相対的に利率が割高な長期国債を発行しておき、この期間に長期資本を確保しておくことが、利子費用最小化の観点から望ましいことになる。